

2013年6月 比良_白滝谷・奥ノ深谷 沢遡行報告書

文章：山本（2）

参加メンバー：CL 寿栄松（4）、末田（3）、西上（2）【京都府立大学山岳部】

松村（2）、山本（2）【神戸大学山岳部】

6/15

山本は 5:15 分六甲道発の電車に乗り、比良縦走組と同じ電車で京都駅へ。縦走組と京都駅で分かれて集合場所のマクドナルドへ向かった。朝マック（チキンクリスマスマフィン）を購入し、ひとまず京都府大に向かった。府大にて全員集合し、装備を整えいざ坊村へ出発。

駐車場で準備をしてから牛コバへ向かう。30分程度歩くと牛コバに着いた。シュラフなど不要な装備を抜き、ザックの防水を確かめ、皆でハーネスのチェックをして（府大では決まりのようだ）ようやく牛コバを後にする。初沢登りの高揚を押さえながら沢へ下り、白滝谷の遡行を開始した。

まずは膝の高さまで浸かり、イメージしていた沢登りと一緒に楽しかったが、寿栄松さんの無茶振りで首まで浸かった。このときはまだ楽しかった。ポリエステル製の上着（緑）があったという間に水を吸って重くなったので、次の休憩の時にはアクティブシェルに着替えた。しばらく遡行を続けていると違和感に気づいた。明らかに重い。足も、ザックも、服も、全部水を吸ってしまっている。ウールの靴下が水を吸ったせいで足が重くなり、一步一步の足運びがぎこちなくなって足を振られたのが特に辛かった。しばらくして靴下も脱いで、裸足+沢靴で遡行を続けた。

何度か泳いだ。イメージしていた沢登りとは違う。6月で沢の水はまだ冷たく、全身が浸かると体力が奪われ、筋肉の動きが悪くなり、そして凍える。爽快であると思っていたがとんでもない。沢登りなんてジャンルが確立されているのが不思議に思えた。（後で書きますが、ちゃんとやれば楽しいです。たぶん。）二日間で大体、山本は6回、松村は10回ほど泳いだらうか、回数が違うのは続きを読んでもらうと理解してもらえらう。

途中小雨が降ってきた。どうせ濡れているのだから関係ないらしい。構わず先に進む。途中何度かロープを出した。ある場所で末田さんがリードしたのだが、足を滑らせて頭からウォータースライディング。ナッツが効いていてよかった。リードは全て府大の人がやってくれて、松村・山本はフィックスをたどるだけで済んだ。プルージックは「バッチマンノット」が優秀だった。「オートブロック」でもいいのだが、バッチマンはアッセンダーのように持つ事が出来て、使い勝手が良かった。

夫婦滝に到着。滝壺は小さなプールのように、寿栄松さんは泳ぐ気満々。私たちもテンションが上がったので、3mほど当然ダイブ。山本は、思ったより爽快な気分になったのもう一度

ダイブした。が、着水して、思ったより深く（足が届かないのはわかっていたが）、また眼鏡を外して視界が悪かったので焦った。それに加えて水の冷たさによって体の動きが鈍っていたので普通に溺れた。（山本はいわゆるカナヅチではないが、普通に溺れた。）寿栄松さんに何とか助けられたので良かったが、命の危機を本気で感じた。

沢沿いの登山道を沢靴で下り、牛コバまで戻った。しばらくは雨が降っていて料理をしようにも出来なかったので焚き火用の薪を集めたりして時間を潰す。今回は中華鍋を持ってきていたので見た目にも美味しい料理ができた。雰囲気って結構重要だ。まずは冷凍してきたカルビを炒める。並行して白米を炊いたが、府大は時間を測って炊くらしい。だが、やはりうちの白米の方が美味しい。少し焦げ臭くなってから火を止めるという炊き方は季節によらず使えていいと思う。カルビを食べた後は、冷凍のサバが泳いでいたので焚き火に晒した。少し時間はかかったが、美味しい。醤油をたっぷりつけるのがまたいい。次々に、タン塩やマシユマロを食べた。コリコリ、トロトロ、美味しい。山の中での食事の大切さを改めて実感した。今年から”エサ派”から”グルメ派”に鞍替えしよう。

就寝。せっかくなのでエマージェンシーシートを使ってみたが、寝転がって使われることを想定していないのだろうか、どの方向で使ってもイマイチ体をカバーしきれていない気がした。1時くらいになると、寒くてシュラフに変えた。とても快適に眠れた。

朝ごはんは、”にゅうめん”だった。ヒガシマルのうどんスープのみの味付けだったが、体に染みてとても美味しい。他にも、中華鍋でアルトバイエルンを焼き、その上にチーズを乗せるという暴挙。今回の一番の収穫は食事に対する意識の変化だった。

牛コバを出る。前日の反省を生かし、靴下は薄手のポリエステル製のものに、上着は最初からアクティブシェルに、また使わない装備もザックから下ろして軽量化した。気合を入れて奥ノ深谷の遡行を開始した。

今回は極力体を濡らす回数を減らして、巻ける所は巻いた。だが、2箇所ほど危ない巻き方をしてしまった。泳ぎだと溺れる可能性があり逆に安全だろうと思ったからである。（今でも巻いたほうが良かったと思っている。）しかし、まずかったのが、他の人が沢の中にいて、その上の斜面をトラバースしたことだ。落石をしてしまったら下の人に当たって大変危ない。タイミングをずらすなど配慮が必要だった。

途中で”滑り台”が出てきた。当然滑る。山本も、岸の位置などを確認し、かつ体力的にも余裕があると判断したので滑って楽しんだ。が、岸へ上がる時に松村に手を貸し、落とされ、寿栄松さんに落とされ、ここまでは楽しかったのだが、三度目に松村に落とされたのが決め手になって普通に溺れた。松村はさらに酷かった。末田さんに助けってもらって瀕死の山本をまた落とそうとしたのだ。

そんなことがあって、沢に浸かるのが怖くなった山本は、極力簡単なルートで遡行した。ちようど天気も良かったのもあって、ようやく本来の楽しみを見つけ出した気がした。終了点までは本当に快適で気持ちよかった。最後に、これが沢登りなのだ。と感ずることができて良かった。

◇反省点

松村

- ・沢タビの脱着に時間がかかった。
- ・山本を殺しかけた。
- ・おふざけが過ぎる。

山本

- ・薄着。着こむと水を吸って冷たいのかと思ったがそうでもないらしい。次からはファイントラックのフラッドラッシュアクティブスキンとフラッドラッシュラビットを持って行こう。
- ・ズボンも要検討。普通のズボンだと水を吸って不快。沢用のやつか、ゴアで行くべき。
- ・沢靴のサイズがあっていなかった。準備不足。
- ・危険なトラバースをした。相談すべきであった。
- ・体力が足りない。寒くてボーっとしている時もあった。

◇収穫

- ・フィックスや自己脱出は、バッチマンが良いと思います。PASS と組み合わせるとある程度上の方まで先に確保できるので登りやすい。
- ・山での料理の大切さに気づいた。
- ・6月の沢は寒いです。8月に行きましょう。
- ・エマージェンシーシートは再利用可能なやつを買きましょう。(シュラフカバーっぽいやつ)
- ・沢の冷たい水に何回も浸かる程度では低体温症にはならなかった。人間って案外丈夫なんですね。